

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5572号  
10月号  
平成26年 10月 4日発行  
宮 崎 県  
宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

### 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	10	30	60
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【概要】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の降水量は、多い確率60%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 10月4日(土)～ 10月10日(金)

台風第18号や気圧の谷の影響で雲が広がりやすく、期間の前半に雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

〈2週目の予報〉 10月11日(土)～ 10月17日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、前線や低気圧の影響で平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

〈3週目から4週目の予報〉 10月18日(土)～ 10月31日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆ 普通期水稻

---

収穫時期は慌ただしく、一瞬の油断や操作ミスで事故となります。ゆとりある作業計画をたて慎重に作業しましょう。

#### 1 適期収穫等

収穫適期は、不稔籾を除いた全籾数の8割が黄化したときで、ほ場ごとに籾色を観察して収穫します。倒伏したところでは茶米や穂発芽が発生している場合があるので、刈分けを行い全体の品質が低下しないようにします。台風等でほ場にゴミが流入していると、機械の故障等トラブルのもととなりますので、予め取り除いておきます。まいひかりの収穫は下旬となりますので、収穫5日前までは間断かん水を行い根の活力を保ちます。

#### 2 乾燥調整

高水分の生籾を高温で急激に乾燥すると胴割粒が発生します。熱風温度は40度以下で、毎時の水分減少は0.8%以下で行い、仕上げの玄米水分は14.6~15.0%となるようにします。

複数の品種を扱う場合は、機械や袋等の清掃はこまめに行い混米防止に努めましょう。

### ◆ 大豆

---

#### 1 排水対策等

湿害対策で排水溝を整備します。逆に干ばつの時は子実の肥大が悪くなるので、水が確保できる所では畦間に走り水を行います。

#### 2 病虫害防除

カメムシは生育後期まで莢を加害し、被害が激しいと株は収穫時期になっても落葉せず青立ちのままとなります。ほ場を観察し農薬基準を遵守し防除を行います。

### ◆ そば

---

そばは湿害に弱い作物ですので、排水溝を設けて排水を徹底します。特に水田では水が停滞しやすいので、ほ場周囲に溝を設置すると効果的です。

(鎌田 博人)

## 施設野菜

### ◆ 共通事項

---

急な冷え込みに備え、暖房機の整備・点検を行うとともにダクトの設置など、いつでも稼働できるよう準備しておきます。また内張ビニルの設置が終わっていない場合は、早目に作業を終え、いつでも保温が開始できるようしっかり準備を行いましょう。

暖房用燃料を節減するためには、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認を行いましょう。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業に心掛けましょう。

### ◆ きゅうり

---

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期で、側枝も発生して早いものでは側枝からの収穫も始まります。側枝の発生をよくするため、やや多目のかん水を行うとともに主枝の摘心が遅れないよう注意します。追肥は、1回目は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょう。また、光線の透過を良くするために、主枝の摘心後より中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間十分日光にあて、本葉2.5枚以降は昼温25度前後、夜間は14度を下限に管理します。

### ◆ ピーマン

---

促成ピーマンは整枝・誘引期になります。この段階での枝づくりは年内だけでなく、全期間の収量を左右しますので、注意を要します。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

### ◆ トマト

---

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行いますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、か

ん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失わないよう注意してください。

#### ◆ いちご

---

今年は、曇雨天の影響で花芽分化が遅れ気味のところも見られましたが、9月に入り、気温の低下とともに、花芽は例年並みの状況となっています。頂花房の発蕾は10日前後と予想され、同時期に第1次腋花房の分化期となりますので、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。追肥は10㎡当たり窒素成分で0.3～0.5㎏/日を液肥で施用します。

(黒木正晶)

## 葉茎根菜類・いも類

#### ◆ キャベツ・レタス

---

キャベツは播種後120日から150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら随時収穫しましょう。

レタスは、12月出荷の定植期にあたり、2～3月出荷の播種期となります。生育適温は15度から20度ですので、本圃では12月上旬にはトンネル被覆が必要となります。

#### ◆ たまねぎ

---

翌春3月以降に出荷する作型の播種期となります。播種床には、10㎡当たり完熟堆肥40㎏、苦土石灰1.5㎏、低度化成2㎏程度を施用し中旬までに播種してください。

#### ◆ しょうが

---

降霜の前に収穫することが必要となるため、霜の早い地区では下旬頃から収穫期に入ります。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

#### ◆ 食用かんしょ

---

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると、過肥大によりいもの形や皮色が悪くなりますので、今月中には収穫を終えましょう。

## ◆ さといも

---

中生種の収穫期となります。「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」や「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としては使用を避けてください。

## ◆ ほうれんそう

---

加工用では厳寒期に収穫する作型の播種期となります。地力の高い排水の良いほ場を選定し、深耕や排水溝等を事前に準備します。また、除草剤は土壌が乾燥しすぎた状態では効果が劣るので土壌水分が適湿の状態です。

(河野 健次郎)

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆ 極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行います。収穫後に秋枝が発生すると翌年の花の減少がみられるので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょう。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いので、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

今年は園地や樹によって結果量にばらつきがあります。結果量が少なかった樹では、翌春の着花量が多くなり、隔年結果が激しくなります。10月中旬頃から夏秋梢の整理を行い、翌年の着花数を調整しましょう。

### ◆ 完熟きんかん

今年は、7月と8月の花が結実している園が多く見られ、平年よりもかなり果実肥大が遅れています。上旬までにビニル被覆を行い、昼間の温度は28度、夜間は18度以上を目安に加温することで、果実肥大を確保しましょう。

### ◆ マンゴー

今年は日照不足で、新梢の発生や充実が遅れている園地が多く見られます。そのような園では、夜間の加温と昼間の高温管理、葉面散布により、新梢の緑化を早めましょう。

最近、果実の軸腐病の発生が増加しています。樹冠内に残る枯れ枝や切り口に発生する黒色の胞子が軸腐病の原因です。ハウス内の胞子の密度を下げ

るため、加温が始まるまでに枯れ枝を全て取り除きましょう。炭そ病対策と併せて、施設内の剪定残さは全て施設の外に持ち出しましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆ 礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花結実が悪くなります。根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

### ◆ くり

収穫後のイガは、実腐病、モモノゴマダラノメイガ等の越冬場所となり、翌年の発生源となるので、土中に埋めるなど処分しましょう。

(山口和典)

## 花き

### ◆ 花き全般

---

10月に入ると夜温が低下してきます。特に中山間地域では急激に低下し、降霜による被害の恐れもあります。施設栽培では保温・加温だけでなく、微生物農薬のダクト散布が実施できるように暖房機のダクト設置等を早めの実施してください。

### ◆ キク

---

秋ギクの主力品種である「神馬」は、10度以下の低温に遭遇すると開花遅延をおこす危険性があります。特に10月以降に定植する作型については、定植直後から低温に遭遇する恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

「神馬」は系統によって生育ステージ毎の適正な管理温度が異なりますので、栽培する系統に適した温度管理を確認しましょう。

導入から数年経過している蛍光灯については、花芽分化を抑制するための必要な光量に足りない恐れがありますので、毎年光量を確認し、導入時からの低下がみられた場合は、適切な時期に交換を行いましょう。

### ◆ スイートピー

---

今月中下旬に発蕾・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに、収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさなどから判断を行ってください。

さい。

曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、気象の大幅な変動による障害が発生しやすい時期になりますので、根域を十分に確保するとともに光線管理等に気を配りましょう。

#### ◆ デルフィニウム

---

中山間地では8月定植分の本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下しますので、適宜かん水や液肥の施用を行いましょう。適期の切り前で収穫し、収穫後の前処理は品質保持剤の濃度、処理時間を厳守し、花落ちのない切り花を出荷しましょう。

平坦地の9月定植分については中旬頃に発蕾が始まります。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行ってください。

#### ◆ トルコギキョウ

---

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなり切り花のボリュームが低下するので、十分にかん水しましょう。また、心つぶれや葉先枯れの発生しやすい品種については、草丈が10センチ前後の頃にかん水を控え、根系の発達を促し、併せて定期的なカルシウム剤の散布を行います。

追肥が後半にずれ込むとブラスチングの発生につながりますので、初期重点の追肥になるように液肥を施します。

今月に定植する作型では、活着を確認したら、光線不足により生育が遅れないようすみやかに遮光ネットを除去してください。

#### ◆ ベビーハンズ

---

気温が和らぎ、伸長量が増え、秋の本格的な収穫が始まります。樹勢が弱い場合は株中心に2～3本のシュートを残し、樹勢が強い場合は規格に達したものは地際から収穫します。葉傷み等で出荷できないものは来年3月に芽吹きで出荷が可能ですので、必要に応じて芽吹き用として維持しておきます。

(中村 広)

## 畜産

#### ◆ 家畜

---

10月に入り、家畜にとって過ごしやすい季節になりました。朝夕の寒暖差が大きいため、子牛、子豚、幼雛は換気と保温に注意します。敷料をこまめに取り替え、畜体の腹部が冷えないようにしましょう。

牛床にふんが溜まったままだと、アンモニアなどの有毒ガスの発生がおき、抵抗力の弱い子牛は呼吸器疾患などを引き起こします。牛床のこまめな清掃を行いましょう。

乳牛に関しては、10月に入っても暑熱のストレスを受けています。ヒートストレスメーターをチェックし温湿度指数が67を下回る時期まで、寒冷紗で直射日光を遮ったり、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策を続けましょう。

## ◆ 家畜防疫対策

---

養豚ではPDEなどの疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人、車両、物資の消毒を徹底しましょう。

養鶏では冬場の鳥インフルエンザに備え、防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行い野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。出入り口の消毒、畜舎周辺の石灰消毒なども徹底しましょう。

## ◆ 飼料作物

---

飼料イネの普通期栽培については、ホールクロップサイレージの収穫時期を迎えます。脱粒に注意し、適正水分60～65%に予乾させ、すみやかにロール・ラッピングします。降雨直後は、水滴や土壌が茎葉に付着します。水分の上昇や土壌の混入は、品質の低下を招くばかりでなく、カビの発生にもつながります。しばらく晴天が続いてから収穫するようにしてください。

(須崎 哲也)

# 特用作物

## ◆ 茶

---

### 1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて、芽揃いが良く摘採が3日程度早くなる反面、冬期の凍害や晩霜害を受けやすいため、茶園の立地条件や栽培品種等を考慮して実施します。

#### ① 整枝の時期

秋整枝は、平均気温が18～19度以下になる頃を目安に行い、山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃となります。

近年は、秋冬期の高温の影響で秋整枝後に再萌芽する場合がありますが、30平方尺内の再萌芽数が20芽以下であれば、収量・品質への影響はない



とされていますので、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足を招かないように注意しましょう。

## ② 整枝の高さ

整枝の高さは、最終摘採・整枝面から3～5ㇿ上で、葉層を8ㇿ以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施します。

## 2 病虫害の防除

今年は、カンザワハダニが多発している茶園が見られますので、秋整枝後の防除や冬期防除を実施し、越冬密度の低減を図りましょう。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、成虫が茶園を飛び回りますので、茶園を良く観察してください。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

(佐藤邦彦)

## ◆ しいたけ

---

### 1 水分管理と環境整備

9～10月は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。この頃の原基づくりがしいたけの発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補給に努めましょう。

また、暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にするとともに、風が強く乾燥しやすいほだ場は、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

### 2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(小田 三保)

## ◆ たばこ

---

今年の通常期販売も来月で収量となります。未出荷の方は、出荷まで適切な貯蔵管理を行うようお願いいたします。

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

- 1 来年作の準備として、日当たり・風通し・排水など、条件の良いほ地

を早期に選定しましょう。新作地や借地は、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作の施肥設計の参考にしましょう。

2 夏期・冬期深耕、耕耘作業は菌密度低下の重要な作業です。深耕、耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めましょう。

3 良質堆肥10t当たり1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保しましょう。切り返しは適度な水分状態（50%前後）を保ちながら、月1回程度切り返しを行い、腐熟促進に努めましょう。

4 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫、作業場の整理整頓・掃除機による清掃を行いましょう。

(松元 貴光)

## 内容の詳細について

---

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

**☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。**

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
普通期水稻	トビイロウンカ ※※	やや多	トビイロウンカの防除適期は幼虫期前半であり、9月第6半旬～10月第2半旬と予想されます。
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫	やや少	幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨でほ場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小昆虫（タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ）によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小昆虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。ミナミキイロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)が、一部地域の露地きゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから、現在未発生の地域でも注意が必要です。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)	— —	
いちご	炭疽病、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ぼに病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類 ※	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	黒点病 ミカンハダニ	やや多 やや多	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発現防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。
	チャトゲコナジラミ	—	県内でのチャトゲコナジラミの発生地域が拡大しています。成虫は新芽に、幼虫はすそ部古葉に寄生するためよく観察し防除を行います。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※※は注意報を、※は防除情報を発表しています。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<a href="http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki">http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki</a> です。</p>			